

2022 推・帰・社

受 験 番 号	
------------	--

# 医学部保健学科

## 小論文 I ・ II 問題

### 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. この冊子のページ数は 8 ページです。1 から 3 ページが小論文 I , 4 から 8 ページが小論文 II の問題です。落丁, 乱丁, 印刷不鮮明の箇所等があった場合は申し出てください。
3. 問題冊子の余白は下書きに使用してもかまいません。
4. 解答は所定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰らないでください。
6. 問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

医学部保健学科

小論文 I 問題

次の英文を読んで、問1～4に日本語で答えなさい。

※著作権により不開示

(GreatSeniorLiving.com, January 11, 2021, “From Therapy Dogs to Robot Seals: How Pet Therapy Can Benefit Seniors”より一部改変して引用)

(注)	healing	癒し
	therapeutic	健康に良い
	senior	年長者
	chronic	慢性的な
	dementia	認知症
	agitation	興奮
	clean up after	~が汚したあとをきれいにする

問1 優しいペットとの交流が人にもたらす恩恵を3つ答えなさい。

問2 年長者が動物を飼うことのメリットを3つ答えなさい。

問3 下線部(1)のような患者が暮らす施設に魚の入った水槽を置いたところ、入所者にどのような効果があったか答えなさい。

問4 下線部(2)が生き物のペットより優れている点を3つ答えなさい。

医学部保健学科

小論文Ⅱ問題

1 次の文章を読んで、問1、2、3に答えなさい。

私たちが、ある音声形態との関連で持っている体験および知識の総体が、そのことばの「意味」と呼ばれるものである。ことばの「意味」をこのように規定すると、次の二つの性質が「意味」に含まれるとすることができる。ことばの「意味」は個人個人によって、非常に違っている。ことばの「意味」は、ことばによって伝達することはできない。この二つの事実をもう少し詳しく説明しよう。

犬が好きな人と、そうでない人とでは、犬という動物に関して、経験したことや知っていることの総体において非常な違いがある。しかしどちらも「犬」という日本語の「意味」は知っていることになる。もちろん今までのことばの意味に関する考え方でも、使う人によって同一のことばの意味に喰違いのあることは認められている。ただ、この個人個人によって相違する部分は、情緒的意味とか、含蓄の意味などという名で、ことばの意味の周辺の、付加的なものであるとされていることが多い。そして意味の中心部分は指示的意味などと呼ばれ、個人によって変動することのない、社会的に安定した共通項と考えられ、この共通項を見出す努力、この共通項をどのように一般化して捉えることができるかに全力が向けられてきた。

私の考えでは、このような (1) 情緒的意味と指示的意味を区別する必要はないし、それは全くできないというのである。もちろん犬のような私たちに身近な動物の場合には、人々の持つこのことばの「意味」に共通部分が多くなることは確かであろう。しかし犬を狼と置き換えてみると、人々の間の、同一の動物に対する理解が、いかに違い得るかが直ちに明らかになる。おとぎ話や童話、たとえば赤頭巾からだけの狼についての知識しか持っていない子供と、狼の形態、足跡、糞、通り道、習性などを熟知している猟師、そして、また世界中の狼の種類、分布、解剖学上の分類学的知識を持った動物学者という三者の間にある、「狼」という同一のことばに関する理解の内容の相違は、「共通部分こそ社会的に共有された意味である」とする従来の考え方が、たとえ作業仮設的な操作概念であるとはいえ、現実の裏付けにとぼしい空疎な虚構でしかないことを示すものと思う。

もう一つだけ植物から例をとろう。現在、多くの都会人にとって、コンニャク、タバコ、綿のようなことばは、これらの植物から製造した製品のことしか意味しないだろう。コンニャクはおでんに入っている、タバコは刻んで紙に巻いて箱に入っている、「わた」は脱脂綿か、せいぜい綿入れの中にあるふわふわしたものといった程度に理解されている。この人たちが山村に出かけたとしても、これらの製品が作られる植物を見分けることは先ずできないし、第一コンニャクが里芋に似た植物の球根から作られることすら知っている人は少ないだろう。農家の人々の持つ、これらのことばに対する知識と経験内容と、都会人のそれとでは、重なり合う所は極く一部でしかない。もし共通部分がことばの社会的な指示的意味だとすれば、コンニャクとは四角いぐにゃぐにゃした食品のことで、植物として生えているコンニャクは、このことばの含蓄的情緒的意味だ！！というような (2) 妙なことになってしまう。このようなおかしい結果にならないためにも、或ることばの「意味」は、その音的形態と結合した個人の知識経験の総体であると考えの方が、ことばの現実に合致すると思う。

ことばの「意味」をこのように規定すれば、それが単なることばで、他の人に伝達できる筈がないのは当然であろう（勿論人は自分の経験について他人に語ることはできる）。たとえば、チョコレートを食べたことがない人に、チョコレートの味を、ことばだけで伝えることはできない。これが、ことばの「意

味」というものは、ことばによっては伝達不可能であるという理由である。しかしことばの「意味」をこのように規定すると、私たちは人から新しいことばを習ったり、人に教えたりすることがある、つまりことばは社会的に伝達することが可能であるという、誰も否定できない事実と、この「意味」の伝達不可能性とは、一体どのような関係になるのかという疑問に答えなければならなくなる。(3) 私の考えでは、人が他人にことばを教えることができるのは、ことばの「定義」を教えることができるからなのであって、実は「意味」は教えていないのである。ことばの「定義」(これにはあとで述べるようにいろいろな種類がある)は伝達可能なのである。

(鈴木孝夫、ことばと文化、岩波書店、90-98、1973。より一部改変)

問1 下線部(1)について、解答欄 -1に100字以内で説明しなさい。

問2 下線部(2)の理由を、解答欄 -2に150字以内で述べなさい。

問3 下線部(3)について、具体例を挙げて、解答欄 -3に150字以内で説明しなさい。

2 次の文章を読んで、問1、2に答えなさい。

実践をふまえ、私たちが日々の保育や子育ての中で、子どもたちの「声」をどのように聴きとることができるか、そのためには何がポイントとなるかを振り返ってみます。

「子どもの声を聴きとる」営みは、子どもを主語としたとき「思いや意見を表し、それを聴きとられる」と言い換えることができます。この、子どもの「意見を表明する権利」は、国連総会で採択され、日本も批准している「児童の権利に関する条約」において、その柱となる一般的視点の一つとして第12条に位置づけられているものです。第12条の理念について詳しく説明している、国連の子どもの権利委員会によって示された一般的意見に基づけば、意見を表明する権利は年齢や能力、その他の背景にかかわらず、すべての子どもに保障されているものです。そこでは、たとえ話し言葉が未発達であっても、あそびや身振り、表情、描画など、その子どもが理解し、選ぶことのできるコミュニケーション方法が尊重されねばならないことが指摘されています。

「声」を聴きとられることは、このように、年齢や言語発達の状態にかかわらず、すべての子どもが有する固有の権利です。それは保育・子育ての実践者である私たちおとなの構えと具体的な手立てとがセットにされたとき、単なる理念であることにとどまらず、はじめて実現可能になると考えられます。では、私たちはどのように、すべての子どもたちの「声」を聴きとることに取り組んでいけるのでしょうか。改めて、3つのポイントから整理してみましょう。

1つは、感情的な共感を越えて、「エンパシー (empathy)」というかたちで相手の立場に立つふるまいを意識することです。

エンパシーを英和辞典で引くと「共感」と出てきます。が、それは一般に私たちがイメージする感情の「共感」と少し異なります。「共感」を引いたときに出てくるもう一つの単語である「シンパシー (sympathy)」が感情面でのそれを指すのに対し、「エンパシー」はいわば「誰かの靴を履いてみる」こと、つまりそれは、よって立つ背景が異なる相手の立場を意識的に取ってみる (1) 知的なふるまいのことです。

こんな状況にもかかわらず、なぜ「あんなこと」ができるのだろう……。誰にとっても、心を寄せやすい相手と、寄せにくい相手がいるものです。自分と考えや感じ方が近い、愛おしい、かわいそうな相手に対する「共感」は特に意識せずともできますが、自分と思いや立場が大きく異なっていたり、気の毒には思えない相手への「共感」は簡単ではありません。考えてみれば、乳幼児期の子どもたちの感じ方や見えている世界は、私たちおとなのそれとはまったく異なるはずです。「いや！フミこれ、や！」と目の前の食べ物に怒っていたフミちゃんにとっての「イヤ」は何だろう……。一歳児にはお話が得意なフミちゃんには、きっとたくさんの伝えたい思いと、受けとめてほしい気持ちがある。でも、そのすべてを言葉にのせるのはおそらく簡単ではなく、わかって支えてくれる相手を何より求めているはず……。フミちゃんの「靴」を意識的に履いてみたとき、「共感」を越えてそれを支える手立てがはじめて見えてきます。今、目の前の子どもに



は、私たちのものと異なるどんな世界が見えているか。その時期に固有の発達の視点や、その子どもの生活・文化的背景に関わる知識を手がかりに、子どもたちに見えているだろう世界を探ることは、その「声」を聴きとり、具体的な手立てとしていくために欠かせない前提です。

2つめは、子どもたちの「声」を聴く構えを、一人ではなくみんなでつくる、すなわち保育者集団として担う体制を確立することです。

一人で相手を理解しようとするとき、ついつい自分の思いを必要以上に相手に重ね、相手をわかった気になることはないでしょうか。特に自分が相手に対し「正しい」関わりをしていると信じているときこそ、立場の異なる相手の声を聴く構えをもつことが、私たちには往々にして欠けがちかもしれません。イギリスの保育研究者ジェーン・マリーは、子どもの「声」を聴くことの定義として、子どもの見方の多元的共存を認識することを挙げます。多様な側面から「声」を聴きとることに責任を負う複数の人の存在と、それが重なる場を設けることは、子どもの姿を多面的に理解していく過程を支えるのに欠かせません。

3つめとして私たちは、「声」の先にある子どもの気持ちや、動きながら明らかになっていく場合もあることを忘れないようにしたいと思います。日々発達していく存在であり、同時にその場の状況からの影響も受けやすい乳幼児の言動は、ある意味で移ろいやすいものでもあります。「ホントの気持ちを特定する」ことが「子どもの気持ちをわかる」最終目的ではなく、それは本来、「声を聴きとられる」過程そのものを保障することにより実践されるべきものです。

発達特徴や生活背景などを手がかりに、子どもの「声」を聴きとり、その「靴」を履いてみようとする構えをもつこと。それを複数のまなざしから受けとめ、共有し、探り続けたい場をつくること。それは「子どもの気持ちをわかりたい」保育実践として、子どもの尊厳と権利を支え、育んでいく保育への歩みそのものです。

(松本博雄, 子どもの「声を聴きとられる」権利を支えるために, ちいさいなかま 8 月臨時増刊号, 92-95, 2020. より一部改変)

問1 下線部(1)について、筆者が述べている内容を解答欄 -1 に 100 字以内で記しなさい。

問2 あなたが将来、思いや立場が異なる相手を支えるとき、その相手の「声」を聴きとるためにどうするか、本文の3つのポイントを応用して、解答欄 -2 に 200 字以内で述べなさい。